

6月24日 わかりません

小学校のとき(いや、今もそうだが)、人前で話すのが苦手だった。特に自分の考えを述べるのが嫌だった。自分の浅薄さを周りに知られるのが恐かったのだろう。だから授業で当てられても「わかりません」としか応えなかった。ほとんどの先生は「そうか。じゃあ次の人」と、飛ばしてくれた。「自分の答えが間違っていたら恥ずかしい」と常に考えていた私にとって、「わかりません」は魔法の言葉だった。

5年生6年生と持ち上がった担任の先生が、なかなかのくせ者だった。顔に傷があり、「ピストルで撃たれたんや」と吹聴していた。生徒の冗談に大笑いしては、丸いおなかを出して、「しょんべんばちびりますたい」と言ってたたいていた。面白いけれど切れると怖い、でも嫌いな先生ではなかった。そんな担任は、相変わらず「わかりません」で通していた私に、「愛川、またわかりませんか」と前置きをつけて当ててるようになっていた。

6年生の授業参観日だった。授業も半ばを過ぎ、私はさすがにもう当てられることはないだろうと高をくくっていた。が、何を思ったのか担任は私の席の前に立って、「愛川くん。答えはなんや」と言った。普段は呼び捨てのくせに「くん」とは。周りの生徒はクスクス笑っていた。さほど難しい質問でもなかったので、答えは私の中にあっただ。が、私は迷わずいつもの魔法の言葉を発した。

「わかりませんって、そんなことないやろ」。そう言って先生はいくつかのヒントをくれた。私はそれを聞きながら、自分の持つ答えが正解であることを確信した。けれども、私が返したのはやっぱり「わかりません」だった。それからチャイムが鳴るまで、私と担任のにらみ合いが続いた。参観中の保護者も含めて、教室は凍り付いていた。

なぜそこまで頑なに答えることを拒んだのだろう。今振り返って唯一思いあたるのは、「普段は『わかりません』で通しているくせに、参観日やったら答えるんか」と思われるのが嫌だったということだ。

担任の先生は、私を変えるチャンスだと考えていたのかもしれない。まったくもって手のかかる生徒だった。

